

主 題：感謝を捧げるのは誰か

聖書箇所：詩篇 33篇

テーマ：私たちが感謝を捧げる“神様”とはどのようなお方か

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは「詩篇33篇」です。私たちは今日のこの時間、感謝を捧げるということについて、特に、今日のタイトルにある通り「私たちが感謝を捧げるお方は誰なのか」ということについて、改めて考えてみたいと思います。その前にいつものようにみことばを読みま

詩篇33篇

33:1 正しい者たち。【主】にあつて、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。

33:2 立琴をもって【主】に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。

33:3 新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。

33:4 まことに、【主】のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。

33:5 主は正義と公正を愛される。地は【主】の恵みに満ちている。

33:6 【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。

33:7 主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。

33:8 全地よ。【主】を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。

33:9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。

33:10 【主】は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。

33:11 【主】のはかりごととはどこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。

33:12 幸いなことよ。【主】をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。

33:13 【主】は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。

33:14 御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。

33:15 主は、彼らの心をそれぞれみな造り、彼らのわざのすべてを読み取る方。

33:16 王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない。

33:17 軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。

33:18 見よ。【主】の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち望む者に。

33:19 彼らのたましいを死から救い出し、ききんのときにも彼らを生きながらえさせるために。

33:20 私たちのたましいは【主】を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。

33:21 まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。

33:22 【主】よ。あなたの恵みが私たちの上にありますように。私たちがあなたを待ち望んだときに。

今から遡ること15年前、2007年の1月に、ある社会実験がアメリカのワシントンポストという日刊紙の一つによって行われました。その実験は、世界的に著名なバイオリニストの一人であるジョシュア・ベルが変装して、忙しい朝の地下鉄の構内でヴァイオリンを弾けば、果たしてどれぐらいの人がその美しい音色に心を留めるかというものでした。当初、この実験を計画した者は、恐らく75人から100人位が彼の演奏を聞くために足を止め、100ドルほどのチップが集まるのではないかと考えていました。ちなみに、彼がこの実験の3日前にボストンで行ったコンサートでは2000人以上も入る会場は満席で、最も安い席でも100ドルの値がついていました。では地下鉄の構内ではどうだったでしょう？実験の当日、ベルは駅にやって来ます。とりたてて、何の特徴もないジーンズに黒い長袖のT

シャツを着て野球帽をかぶって現れ、ケースからバイオリンを取り出して曲を引き始めます。こうして彼は朝のラッシュアワーの最中、約45分間にわたって6曲ものクラシック音楽を演奏するのです。その間、実に1000人もその前を通り過ぎて行きました。しかし、そのほとんどの人がこの美しい演奏に足を止めることはなかったのです。最終的に足を止めて耳を傾けたのはたったの7人、また、彼が稼いだ金額は合計で32ドル17セントでした。驚きだと思いませんか？もし皆さん、人々がこのバイオリニストの正体が世界を代表するクラシック音楽家であると気付いていれば、当然、結果は変わっていたでしょう。また、彼の使っていたバイオリンが推定3億円もするストラディバリウスであると彼らが認識していれば、その演奏の価値の大きさを知って、この機会に感謝したことでしょう。しかし、人々はそれに気付くことはありませんでした。世界的に有名なジョシュア・ベル、彼の奏でる美しい音楽は確かに彼らのすぐそばにはありました。しかし、人々はそのすばらしさを正しく見ることはできなかったのです。

これを聞いてある人は思ったかもしれません。「もったいない！」、自分なら立ち止まって耳を傾けるのに、そんなすばらしい機会があれば感謝するのに…と。でも皆さん、ちょっと考えてみてください。どうでしょう？残念ながら、私たち自身も時にまるで気付かずに通り過ぎてしまった人々のように、神様に対して同じような態度を取っていたりしないでしょうか？私たちが日々の歩みを振り返ってみるなら、そこにはいつも神様の偉大さを見出すことができるにも関わらず、いろいろなものに邪魔されてそれが見えなくなっていることがあるかもしれません。私たちは余りにも自分の経験している目の前のことに心が捉われてしまって、その時に感じている思いに左右され易いから、すぐに神様を忘れて不平不満というものを覚えるかもしれません。神様の恵み、祝福は周りにたくさん増えているにも関わらず、それに目を留めることに難しさを覚えて、自分の状況に心が支配されてしまう、そのような弱さを私たちはみな持っているのかもしれない？

どうでしょう？私たちは今日、神様の偉大さに心を留めているのでしょうか？もし皆さんが目を留めていると言われるなら、どんなときも変わることはないこの方のすばらしさを覚えていると言われるなら、では、この方が本来受けるべき感謝を私たちは心からの感謝として示しているのでしょうか？自ら進んで賛美や喜びを言い表そうとしているのでしょうか？それともその価値に気付かないで、そこにあるにも関わらず、そこに居るにも関わらず、関心を払わないで、ベルの前を通り過ぎていった通行人のように、神様のすばらしさを忘れて感謝をしないそのような歩みをしていないのでしょうか？

今回、私たちが見ていくこの詩篇33篇は、今まで私たちが見て来た詩篇と違って表題がありません。33篇のその下には何も書かれていません。振り返ってみて、これまで私たちは32の詩篇を見て来ましたが、表題がなかったものは1篇と2篇と10篇の三つだけでした。後は全部表題がついていました。表題が付いていないということは、つまり、作者が誰なのかがよく分かっていないことを表しています。ある人は、32篇の終わりの部分、11節を見ると「正しい者たち。**【主】**にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。」と書かれています。そして、33篇の最初、1節を見るとそこにはこのように書かれています。「正しい者たち。**【主】**にあって、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。」と。このように似通ったことばが書かれているので、二つのものがひと続きであったのではないかと考えて、だから、33篇もダビデによって書かれたのではないかと言うのです。でも残念ながら、それが確実にそうであると言える根拠はありません。ですから、今回私たちが見ているこの詩篇33篇は、作者が誰なのか、そして、どんな歴史的背景のもとで書かれたのかについてはよく分からないのです。でも皆さん、それが分からないとしても全く問題にはなりません。この詩篇は非常に分かり易く、私たちが耳を傾けなくてはならない教えを私たちに示してくれています。その教えとは、私たちは神様がどんなに偉大なお方かを覚え、この方に向かっていつもふさわしい誉め歌を捧げることが大切だということです。そのようにして神様に感謝を捧げることは私たちにとって当然の行

為であり、また同時に、それがいかに私たちにとってすばらしい喜びをもたらしてくれるものなのかということについて著者は明らかにしてくれているのです。ですから皆さん、これから私たちは今一度、この詩篇を通して、私たちが神様に感謝を捧げるといふこと、そして、何よりも私たちが感謝を捧げている神様がどれほど栄光に溢れたお方なのかということ、そのことをごいっしょに考えてみたいと思います。このみことばが改めて皆さん自身と聖書の神様との関係を個人的に正しく考える、その助けと励ましになることを心から祈っています。

○命令：神様に喜んで感謝を捧げること 1－3節

では、早速、内容を見て行きましょう。この詩篇を始めるに当たって著者はまず1節から3節のところではっきりとした命令を与えています。神様を愛する者たちに対してあることを求めているのです。いったいそれは何でしょう？1節から「1: 正しい者たち。【主】にあつて、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。:2 立琴をもって【主】に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。:3 新しい歌を主に向かつて歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。」、ここで与えられていた命令は非常にシンプルなものです。神様に喜んで感謝を捧げるようにと、それがここで与えられていた命令でした。正しい者たちや心の直ぐな人たち、言い換えるなら、神様に従って忠実に歩む者、この方の前に喜ばれる正しいことを追い求めようとする者、その者たちは主に向かつて心からの賛美を捧げるようにと、そう著者は訴えていたのです。

また、この箇所を読んだ皆さんはすぐに気付かれたかと思いますが、著者はそのことを強調するために、この箇所でも五つの異なる命令形の動詞を用いています。そのことで神様に賛美するということをここで強く求めていたのです。1節には「【主】にあつて、喜び歌え。」、2節を見ると「立琴をもって【主】に感謝せよ。」と「十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。」、3節には「主に向かつて歌え。」、最後に「巧みに弦をかき鳴らせ。」と。最初に見る「喜び歌え。」ということばを考えてみると、これは元々「喜びや熱意に溢れて大声で叫ぶ」という意味があります。そして、ここからこのことばは敵に勝利した者が上げる歓喜の声、歓声であったり、主の救いのみわざに対する喜びの叫びに用いられたりします。例えば、旧約聖書のゼパニヤ書にはこのように書かれています。3:14－15です。「:14 シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。:15 【主】はあなたへの宣告を取り除き、あなたの敵を追い払われた。イスラエルの王、【主】は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわざいを恐れない。」

どうですか？皆さん、敵に勝利した者たち、自分たちの目の前から敵が追い払われて勝利した者たちがどのように喜んでいたのであるのか？その姿を私たちは容易に想像できませんか？間違いなく言えるのは、その者たちの内には嬉しさや安堵感が満ちていて、抑えることのできない喜びに溢れていたということです。止めることのできない喜びがすぐに口から出て来るように、大きな声を上げて神様に感謝を捧げたい！と…。ですから、主に誠実に従う者たちはそのようにして、敵に勝利した者たちが大きく喜んでいたように、溢れんばかりの喜びを、神様に対する感謝を自分の声だけでなく、2節にあるように立琴や十弦の琴をもって、めいっぱい熱心に表現する、そのことが求められていたのです。心から喜びをもって主を賛美しようと、それこそが主に誠実に忠実に仕え従おうとする者たちの最も適切な応答であると、著者はそのように言うのです。

またここで、皆さんにもう一つ注目して欲しいことがあります。それは3節の初めに「新しい歌を主に向かつて…」という表現がありますが、この「新しい歌」ということばです。これは何のことでしょうか？もしかすると、ある人はこのように思うかもしれません。これが間違っているわけではないのですが、私たちが賛美をする時にはこれまでに一度も歌ったことのない新しい歌を歌うのですか？昔から歌われてきた古い讃美歌だけでなく、今どきの新しい賛美というものを毎回導入して歌うことが必要なのですか？…と。もちろん皆さん、私たちが昔から歌われて来た讃美歌だけでなく、新しい賛美をもって神様

を称えることは当然できます。でも、ここで「新しい歌」ということばが使われているのは、曲自体が古いとか新しいということではありません。では、いったいこのことばは何を意味しているのでしょうか？簡潔に言うなら、新しい歌を歌うということは、私たちが主に賛美をささげるとき、主の恵みやみわざを覚えて、いつも心を新たに新しい思いや新しい動機をもって神様に感謝を捧げるということです。別のことばで言うなら、私たちが神様の偉大な御恵みを日々体験している中で、その神様に対していつも新鮮な思いをもって賛美を捧げるということです。

H. C. リューポルドという先生はこのことばに関してこんな説明をしています。「(新しい歌とは) 感謝と喜びの心から新しく湧き出てくる歌である」と。どうでしょう？皆さん、そんな歌をご自身も捧げたことはないですか？例えば、新しい朝を迎えて、私たちは神様に感謝して一日を始めます。それぞれの仕事、勉強、家事や子育てなど、そうして一日の終わりを迎えます。そのときにその日の歩みを振り返ってみて、そこには神様を誉め称えることのできるたくさんの事が朝よりも溢れていることに気付かされませんか？神様は今日の一日も私を支えてくださった、朝には思いもしなかったような方法で今日一日を通して神様は祝福を与えてくださった、確かに、困難なこともあったけれど、でも、神様は今日も私のことを守り導いてくださったと。そのようにして、神様の溢れるばかりの恵みや偉大なみわざを私たちが日々様々な形で目の当たりにするなら、私たちは神様に対してまた新たな理由をもって、新たな思いをもって、心から湧き上がる歌を捧げようとするのです。皆さん、これが神様に従う者たちに与えられている大きな責任でした。神様が与えてくださる数え切れないほどの恵みを覚えて、どんなときも喜びと感謝をもって心を新たにこの方に心からの誉め歌を歌おうとする。このことが最初に著者が私たちにも求めていたことでした。

○四つの理由：なぜ神様に喜んで感謝を捧げるのか 4-19節

さて、こうして1節から3節のところで、神様に喜んで心からの感謝を捧げるようにとの命令を与えた著者は、続く4節から19節のところで、なぜそれが求められるのか？その理由を上げています。私たちがみことばを目の当たりにするとき気付くことですが、みことばはただ「こうしなさい」との命令を与えているだけでなく、なぜそのようにすることが信仰者にとって相応しいのかというその根拠を述べています。この4節から19節では「神様に喜んで感謝を捧げる」その四つの理由を見て取ることができます。一つずつ見ていきましょう。

1. 神さまはそのご性質が正しいお方だから 4-5節

まず一つ目の理由として挙げられるのは「神さまはそのご性質が正しいお方だから」ということです。4節から見てください。「:4 まことに、【主】のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。:5 主は正義と公正を愛される。地は【主】の恵みに満ちている。」、何よりもこの方のことばがいつも正しく、そのみわざがことごとく真実なものだからと、それが理由です。「主のことばは正しく」という表現、この「正しい」ということばは元々「一直線に進むこと、脱線することなくただ真っすぐに進む」という意味です。ここから「偽りなく正しく公正であること、まっすぐに正直であること」という意味で用いられるのです。つまり、主のことばが正しいというのは、それがいつも偽りがなく公正であるということです。主はどんなときもご自分の語られたことを必ず守られて、その約束は失敗に終わることが決してないというのです。

また、それだけではありません。この方は同時に、為されるすべてのみわざもことごとく真実であると言われました。神様はご自身の約束されていたことを必ず成し遂げられるということです。イザヤ書55:11にこのようなことばが記されています。「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」と。皆さん、私たちはこの神様を見上げることができます。このお方がご自分のことばを必ず守られ、約束されたことを必ず成し遂げられるお方であるからこそ、私たちはこの神様に何があろうとも

信頼することができるのです。このような正しい神様が悪を憎んで正義と公正を愛されるお方であるからこそ、私たちはこの神様の為されるその正しいみわざにどんなときも期待をして待ち望むことができるのです。そして、こんな神様を覚える時に、この方のご性質がいつまでも変わることはない正しいお方であるということに心を留める時に、私たちはこの方を心から誉め称えようとするのです。

皆さん、神様がそのことばにおいて正しくて、そして、そのみわざにおいてことごとく真実だということ、これが私たちが神様を賛美するのに十分な理由です。私たちがその神様を覚えること。その神様の姿を正しく心に留めること、それだけで私たちは神様に心からの喜びを心からの感謝を捧げるのに十分だということです。ですから皆さん、私たちは自分たちの周りの状況が思い通りになった時、自分の願っていたことが成し遂げられた時だけ主を誉め称えるのではありません。もちろん、それも当然神様に感謝することはできます。しかし、たとえ願った通りになろうとならないとも、私たちはどんな時も神様の変わらない誠実さと正しさのうちに、喜び、感謝するのに十分過ぎる理由を見出すことができるということです。神様が神様であられることを覚える時に、私たちはどんな状況であろうともそこに喜ぶことのできる理由を見出すことができるのです。

確かに、私たちは日々の生活の中で様々なことが起こります。そのことで心を騒がせることがあったりします。特に、今のこの世の中にあっては不安定で先に何が起こるのか分からないような、先が見えない中では恐れを覚えることもあるでしょう。自分の手に負えないようなものが突然降りかかってくると、不安や悲しみに襲われることもあります。そして、そんな状況に置かれると、私たちは神様に疑問を抱いて喜びを失ってしまうこともあるでしょう。「本当に神様は言われていたようにすべてのことを成し遂げられるのだろうか？悪が蔓延っているように私には思えるこの状況の中で私は良い所を見出すことができなけれど、でも本当に約束通りに神様は正しいことを為されるのだろうか？」と。もし、私たちがそんな状況に置かれることがあったなら、私たちににとって大切なことは何か分かりますか？

それは、自分の置かれている状況を通して、神様のご性質を神様を判断しないということです。私たちが置かれている変わってしまう状況をもって変わらない神さまを判断しないということです。みことばは私たちに神様がこのようなお方だということをはっきりと教えてくれています。この方のことばは正しくこの方のみわざはことごとく真実である、この方はどんなときにも正義と公正を愛される、その恵みは地に満ちていると、このお方のご性質は変わることなくみことばを通して私たちに示されています。私たちが覚えなくてはいけないことは、私たちの目をこの神様に向けることです。みことばが私たちに教えてくれているその神様の姿、神様の変わらない姿に目を向けて、そこに喜びを見出すということです。

皆さん、そこに慰めを見出すことができるのです。そして、そのようにして私たちが正しく神様を見上げてみことばが教えている通りのお方であること、正しく真実であって正義を愛しておられ恵み豊かなお方であると、私たちがそのように覚えるなら、皆さん、この方のうちにあって、私たちはもう恐れを抱く必要はないのです。私たちに分らなかったとしても、この方は知っておられる。この方は必ず言われたことを成し遂げられる。たとえ、状況がすぐに変らなかったとしても、この神様のうちに私は希望を見出すことができる。なぜなら、神様正しいお方だからと、そのようにして私たちは歩いていくことができるのです。そして、こんなすばらしい神様を私たちが覚える時に、私たちがこの方にできるふさわしい応答は何でしょう？それはこの方に対して「喜んで感謝を捧げること」です。

2. 神さまは偉大な力を持ったお方だから 6-9節

続けて、なぜ神様に感謝を捧げるのか、その二つ目の理由が挙げられています。それは「神様は偉大な力を持ったお方だから」です。神様のことばはただ正しいだけではなく、このことばは世界のすべてを創造したそんな力のあるものでした。そのことが6節から9節に記されています。「:6 【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。:7 主は海の水をせきのように集め、深い

水を倉に収められる。:8 全地よ。【主】を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。:9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。」

皆さん、この箇所を示されている神様のその力は私たちの想像では到底理解も出来ないはるかに優れたものでした。よく目を留めてみてください。著者はこう述べています。「【主】のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。」と。ここで言われていることは、神様はことばによって世界のすべてを造られたということです。神様は何もないところからただ語ることを通してすべてのものを生み出されたわけです。そんな驚くべき創造のみわざに関しては、皆さんもよくご存じの通り創世記1章に書かれています。思い返してみてください。創世記1章の1～3節「:1 初めに、神が天と地を創造した。:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。」、神様が光を生み出すためになされたこと、それはただ「光があれ」と語ることででした。このことだけを考えても、神様が私たちとは全く異なる存在であることは言うまでもありません。考えてみると、私たちが何かものを作ろうとする時、私たちはそのための材料や道具を揃えなければいけませんし、実際に自分自身の手を使ってそれらを組み立てなければいけません。当たり前のことですが、私たちはだれひとりとして、単にことばだけで何かを生み出したり作ることなどは絶対来ないのです。しかし、神様はだれかに助けをもらう必要もなければ、だれかから知恵を借りる必要も一切ありませんでした。すべてのことをご自身の力とその知恵によってのみ成し遂げられたわけですから。これが私たちの愛する神様の姿でした。これが私たちが仕え私たちが信頼し、私たちがどんなときも希望を持つことのできる創造主なるお方の姿でした。こんな力強い神様は他には存在しません。かつて、追い迫るパロの軍勢から紅海を通して助け出されたイスラエルの民たちも自分たちの主の姿をこのように言い表しています。出エジプト記15章10～11節「:10 あなたが風を吹かせられると、海は彼らを包んでしまった。彼らは大いなる水の中に鉛のように沈んだ。:11 【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方がいるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができますでしょうか。」と。

彼らも自分たちの主がいかに偉大な力のあるお方なのかを目の当たりにしました。そして、そのことで神様を誉め称えたのです。この方の前にふさわしい恐れを抱いていました。同じように、そんな力強いすべてを造られすべてを支配されている、そんな権威ある神様がともにおられることを私たちが覚えるのであれば、そのお方に対して私たちが示すふさわしい態度は「感謝を捧げること」です。この世界をことばだけで造られたその神様に対して私たちが示すにふさわしい態度は感謝であり、そして特に、8節に書かれました。「全地よ。【主】を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。」と。このお方の前に私たちは正しい恐れ、正しい敬意を抱かなければいけないということです。それが適切な対応、適切な応答です。神様の偉大な力を正しく認めている者は、この方が受けるに値する敬意と称賛を心の底から捧げようとするのです。

3. 神様はすべてを支配しておられるお方だから 10～12節

三つ目の理由として挙げられているのは「神様はすべてを支配しておられるお方だから」です。神様のことばはいつも正しいだけでなく、そのことばによって世界のすべてを造られただけでなく、その上に、この世界で起こるありとあらゆるものを思いのままにされるそんな力をもった存在でもありました。だからこそ、誉め称えられるべきお方なのです。そのことが10節から12節に記されています。「:10 【主】は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。:11 【主】のはかりごととはこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。:12 幸いなことよ。【主】をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。」、気付かれたと思いますが、ここには明確な対比が記されています。それは「国々のはかりごと」と「主のはかりごと」、そして「民の計画」と「御心の計画」です。その違いに関して著者はこのように言われます。「【主】は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむな

しくされる。」と。ここで用いられている「むなしくされる」ということばは「その行為を止めさせる、計画されていたものを妨げる、阻止する」という意味が含まれています。つまり、ここで言われていることは明白です。たとえ、どれだけ人が自分たちの計画を前もって綿密に立てていたとしても、神様はそれらを容易に阻止することができる、そんな力を持っておられるということです。そして、それに続いて「【主】のはかりごととはこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。」とあります。言い換えるなら、神様の計画こそが永遠に堅く立てられ、その御心は必ず成し遂げられるということです。

このすべての主権者であるお方こそが知恵に満ち溢れていて、思いのままにご自身の望むことを成し遂げられる、そんな力を持った神様でした。人の計画とは違うのです。イザヤ書46：10にはこのように書かれています。「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う。」、私たちがそのことを覚える時に、この方のその姿を覚える時に、私たちはいつもこの神様に信頼を置くことができるのです。この神様がいつも真実をなされると信じる時に、私たちはこの方の御手のうちに身を委ねることができるのです。今起きていることが、たとえ私には理解できなかったとしても、この方は正義と公正を愛されるお方、この方は言われたことを必ず成し遂げられると…。そして、それだけでなく、すべてのものを支配されておられる。すべてのものを支配しているお方は、必ずすべてのものを通して栄光を現されるのです。私たちがこの神様を覚える時に、私たちはこの神様に対して確信を抱くことができるのです。

でも残念ながら、わたしたちは時にこの神様のことを忘れてしまうことがあります。自分の手に負えないような問題が降りかかってくる時、苦難や大きな失望を味わうとき、私たちの心はその問題にだけ目が向いてしまっ「神様は本当にこの状況さえも支配されているのだろうか？」とそのような疑いを抱くことがあったりします。神様が支配することに失敗したかのように、そう思えるようなこと、そう思い込もうとすることもあったりするかもしれません。思い返してみると、あのヨセフも同じような疑いを神様に対して抱いてもおかしくないような酷い経験をしました。皆さんよくご存じだと思いますが、当時17歳だったヨセフは、ある日自分の兄弟たちによってエジプトへ奴隷として売り飛ばされてしまいます。この時の彼はどれほどの恐怖や失意を覚えていたことでしょうか。慕っていた兄たちによって乱暴に身ぐるみ剥がされて、彼らにあわれみを求めても聞き入れられることはなかったのです。そして、奴隷として連れて来られたエジプトの地でも、本来なら、受ける必要もない扱いを彼は何度も受けて、大きな苦しみを味わうことになったのです。まさに、本当にこの状況さえも神様は支配しておられるのですかと、そのような疑念を抱いても仕方のないような状況に置かれたのです。

でも皆さん、私たちが知っていることは、すべてのことが神様のご計画のうちに起こっていたことだったということです。後に、エジプトにおいて全土で起こった7年間の大飢饉を乗り越えることができたのは、そのとき神様に用いられていたエジプトにいたヨセフの働きによるものでした。ヨセフの置かれた状況は、当初、だれの目にも最善だとは到底考えられないものでした。けれども、神様はそのような中であつても変わらずに働かれ、すべてのことを益とされたのです。ヨセフ自身も神さまを覚えて、そのことをこのように語っています。創世記50：19－20です。「19 ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。：20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」と。神様はすべてのことを支配されておられるお方です。主権者なる神様は私たちそれぞれの人生におけることも、また、この世界に起こっているありとあらゆるすべてのことをも支配されているお方です。また、私たちの目には見えないことがあつたとしてもみことばが私たちに教えてくれていることは、神様はすべてのものを支配されておられるというその姿です。そして感謝なことは、私たちが今日この同じ主権者なる神様に信頼して歩いていくことができるということです。

そうであるなら皆さん、どうでしょう？私たちは私たちの主がすべてのことを支配しておられる主権

者だということを覚えて、それにふさわしい歩みをしているのでしょうか？この方が自分自身のすべてのことも、この世界に起こっているすべてのこともすべて支配されていると心から信じてそれにふさわしい歩みをしているのでしょうか？この方は必ず約束されていたことを成し遂げられて、正しいことを為されるそんな誠実なお方であると覚えて歩んでいるのでしょうか？そんな神様に自分のすべてを喜んで捧げること、その幸いを味わいながら歩んでいるのでしょうか？それとも自分のすべてを明け渡すことを拒んで、自分の知恵や力に頼って生きようとしていないのでしょうか？まるで神様がすべてのことを支配していないかのように、自分自身が何かしら支配しなければいけないと頑なになって、神様を見上げることを忘れてはいないのでしょうか？もし、私たちが今もなお自分自身の周りの環境や自分自身のうちに信頼を置いているのであれば、自分の思い通りにならないことが起きるとその信頼はすぐに容易に崩れ去ってしまいます。そして、その中にあって、私たちは不安や恐れを抱いてこんな状況の中でどうしたらいいのだろうと嘆いてしまうのです。

私たちに必要なことは、たとえ、理解できないことがあったとしても、私たちの理解よりもはるかに優れて素晴らしいことを必ず成し遂げられる主権者なるお方に身を委ねて歩むことです。私たちは何も支配していません。神様はすべてのことを支配しておられます。だれに委ねることが私たちにとって知恵あることなのか、私たちに喜びなのか、私たちに感謝なことなのかを私たち自身は考えてみる必要があるのです。そして、私たちがすべてのことを支配されているその方に身を委ねるのであれば、私たちはそこに真の喜びや慰めを見出すことができます。神様はすべてのことを思いのままに支配されているそのような存在として神様の偉大さを覚える時に、私たちにふさわしい応答はこの方に対して心からの賛美を、心からの感謝を捧げることになるのです。

4. 神様は恵みによって救いを与えてくださるお方だから 13-19節

そして最後に、四つ目の理由として挙げられるものは「神様は恵みによって救いを与えてくださるお方だから」です。13節から19節のところにこのように続いています。「:13 【主】は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。:14 御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。:15 主は、彼らの心をそれぞれみな造り、彼らのわざのすべてを読み取る方。:16 王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない。:17 軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。:18 見よ。【主】の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち望む者に。:19 彼らのたましいを死から救い出し、ききんのときにも彼らを生きながらえさせるために。」

この世界をことばによって創造し今も変わらずに支配されているそんな神様は13、14節にこのように書かれています。「:13 【主】は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。:14 御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。」、言い換えるなら、この創造主なる主権者なるお方は、人が何を考えているのか、何をしているのか、それらすべてのことを見て取ることができるお方だということです。例えば、私たちの周りの人には見えていなかったとしても、この方は私たちの心のうちにあることをもうすべてご存じなのです。そして、すべてを知っておられる全知全能の方が、主を恐れ恵みを待ち望む者たちに対して目を留めて、そして、その者を守ってくださるのです。素晴らしいと思いませんか！

特に皆さん、18、19節をもう一度ご覧になると「:18 見よ。【主】の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち望む者に。:19 彼らのたましいを死から救い出し、ききんのときにも彼らを生きながらえさせるために。」、たとえ、死やききんという、この当時考えられる最も深刻な問題がその人に迫ることがあっても、神様がいつも目をかけてくださるから、主の目は死を恐れる者に注がれているからこそ、その人に必要な助けと救いは必要な時に備えられるということです。

皆さん、このような神様がここに記されているのです。このような神様の姿が描かれています。それなら、私たちはいったいだれに信頼するべきでしょうか？何に救いを助けを見出そうとするべきでしょうか？著者はこうも言っています。16、17節「:16 王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は

力の強いことによっては救い出されない。:17 軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。」、これ読んで皆さんその通りだと思いませんか？少し考えてみてください。ここに書かれていることばと神様のことを比べてみてください。神様がただことばによってこの世界のすべてを創造された、そのような力を持ったお方であるなら、いったいどんな王様やどんな王様の武器や馬がその力に対抗することができるでしょう。どんな時代になろうとも変わらずに、大きなものから小さいものまですべてを支配することができるその力を持ったお方が神様であるなら、いったいどんな人の知恵や策略というものがこの方に対抗することができるでしょう。この神様に救いを見出そうとするのか、それとも、この16、17節に見る王の軍勢や勇者、軍馬などに救いを見出そうとするのか？そんなところに救いはないと書かれています。

どれほどの困難や問題であっても、そこからの救い助けというものは、ただあわれみ深い神様のうちのみ見出すことができるのです。それなら皆さん、この神様にどのように向き合うのでしょうか？全知全能の神様に対して私たちがとるべきふさわしい応答はいったい何でしょう？それは、この方の前にただへりくだって感謝を捧げることです。それがこの詩篇の著者が繰り返して私たちに教えてくれていたことでした。神様の前に神様の偉大さを覚える時に私たちにできること、私たちにとっての責任はただこの方の前に感謝を捧げることだと。それは私たちにとっての責任であるのと同じように、私たちにとっての喜びでもあるのです。

さてここまで、神様に喜んで感謝を捧げることのその命令と四つの理由を述べて来た著者は、最後、20節から22節のところでのこの詩篇をまとめてこのように記しています。「:20 私たちのたましいは【主】を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。:21 まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。:22 【主】よ。あなたの恵みが私たちの上にありますように。私たちがあなたを待ち望んだときに。」と。神様がそのことばにおいていつも真実であり、世界のすべてを創造された偉大な力を持ったお方であり、すべてのことを支配しておられる方であり、そして、恵みによって必要な助けを与えてくださるお方であると、そのことを知っているのであれば、その神様に対して人が取れるふさわしい応答はこの方に対して感謝をもって「待ち望む」ことです。たとえ、どんなことがあろうとも喜びの賛美を捧げて、この偉大な方のうちに静まって信頼し続けることが求められます。皆さん、幸いなことだと思いませんか？私たちがどんなお方に身をゆだねることができるのか、どんなお方に信頼することができるのか、そのことを考えれば考えるほど、私たちには感謝しかありません。「主は、われらの助け、われらの盾。」と20節に書かれています。この「盾」「助け」とはどのようなものでしょう？それは、この世界のすべてのものをことばによって造られた偉大な力を持ったお方、この世界のすべてのものを支配されているそんなお方が、言われたことを必ず成し遂げ約束を必ず守られる、そのお方が与えてくださる「守り」なのです。その方ご自身が私たちの守り助けなのです。そのお方に私たちは信頼して歩むことができるのです。

世界の創造主であり主権者であるそのお方の守りに身をゆだねることができるのです。このことはすごいことだと、そう思いませんか？エドワード・カラミーという人物が神様に信頼することに関してこのような話を書き記しています。「ある若者のすばらしい話がある。海が激しく荒れ狂う大嵐の中、乗客全員が恐怖で途方に暮れていたときに、彼だけが全くそれに動じることなく明るかった。その理由を尋ねられた彼はこう答えるのだった。「船の操縦士は自分の父親でした。彼が自分のことを守ってくれと私は知っていたのです。」私たちの父である偉大で知恵ある神様は、すべての戦いの結果も、すべての問題さえも永遠の初めから決めておられる。彼こそが私たちの船長であり、…この船長が私たちのことを守っていてくださるのだ。」と。皆さん、もし、私たちが自分のうちや周りの人や状況に今なお希望を見出そうとしているのであれば、その希望は失望に終わってしまうでしょう。しかし、もし、神様にそれを見出そうとしているのであれば、その希望は決して失望に終わることはないのです。

なぜなら、それは、この方のことばは決して失敗で終わることはなく、この方は正しく真実のお方であるからこそ、その約束は必ず成し遂げられるからです。この方はだれかの助けや知恵も必要とされず、世界のすべてをご自分のことばだけで創造されたからです。また、それらすべてのものを今もなお変わらずに支配しておられる。そして、このお方は主を恐れ待ち望む者に目を留めてくださって、その者を守り導き、助けを与え、その心に喜びを与えてくださるのです。このお方に希望を置くなら、その希望は失望に終わることはないのです。

さて、どうでしょう？皆さん自身はこんな神様の偉大な姿に今日心を留めているでしょうか？こんな神様の姿に気付いて、その方にふさわしい感謝を捧げているでしょうか？それともあのジョシュア・ベルの前を通り過ぎていった通行人たちのように、私たちの偉大な神様の姿を忘れて、いろいろなものに心が捉われてこの方の姿を忘れて感謝がないような、そんな歩みをしていないでしょうか？もし、この中にまだ神様のことを個人的に知らない方がおられるなら、イエス・キリストを自分の救い主として主として個人的に知らない方がおられるなら、この主を今日知ってください。私たちが今日見て来たみことばが語っていたように、この神様は天から人の子らをご覧になっておられるお方です。この方はあなたが心の中で考えていることも心の中で思っていることも何もかもご存じのお方です。そして、そんな神様の前に立つ日が必ずやって来ます。この方は一つの罪をも赦されることは決してありません。この聖い神様は正しい基準で必ず正しいさばきを与えられます。ですから、その日が来る前に自分自身の救いを自分のこととして考えてください。救いはこの世の中にはありません。救いはただイエス・キリストにのみあります。神の子としてこの地上に来てくださって、私たちの罪の代わりに死んでくださったこの方に、この方の十字架によるそのみわざにのみ、十字架と復活のみわざにのみ救いはあります。ですから、そのことを自分のことと信じて悔い改めて、そして、この方に従って歩み始めてください。今日がその日であることを心から願っています。

兄弟姉妹の皆さん、私たちは今日、神様の姿というものを改めて考えました。すばらしい神様に私たちは信頼することができます。従うことができます。喜びを見出すことができます。そんなお方に私たちが示すべきふさわしい態度、それは「感謝を持って賛美すること」です。そのような者としてともに成長していきましょう。